

秋の遠足

運動会が終わった翌週の月曜日(10月28日)、第2すずかきしおか幼稚園では秋の遠足を実施しました。朝方まで雨が降っており実施が危ぶまれましたが、7時ごろには雨も上がり時折晴れ間も見えるようになり、通園バス(すずか幼稚園からも2台の通園バスが応援)を使って楠中央公園に向かいました。

年長組と年中組の子どもたちは、一番奥にある遊具のところまで歩いて行き、広い芝生や園とは違う大きな遊具に大喜び!早速、友だちと声を掛け合い、鬼ごっこをしたり、何度も雲梯に挑戦したりして体を思い切り使って遊びました。お弁当を食べた後は、公園周囲を一望できる丘に登り、みんなで「ヤッホー!」と叫びながらきれいな景色を楽しみました。年少組と年々少組の子どもたちは、入口近くの遊具のところシートを敷いて楽しみにしていたお弁当とお菓子を頂きました。その後は、先生や友だちと一緒にブランコをしたり、すべり台をしたり、先生と追いかけっこをしたりして遊びました。子どもたちの笑い声があの広い楠公園に響きわたりました。

すずか幼稚園では、31日(木)に秋晴れの中で実施しました。

年少組と年々少組の子どもたちは園から神戸公園まで徒歩で向かいました。大人にとっては近い距離でも、子どもたちにとっては一般道路を団体で整列して進むというのは結構な冒険です。神戸公園では、遊具で遊んだり学級ごとに集まってお弁当を食べたりして楽しく過ごしました。

年長組と年中組は、通園バス(第2すずか幼稚園から1台のバスが応援)で津市にある中勢グリーンパークに向かいました。とても広い広場と非常に大きな総合遊具で遊んだり、学級ごとで丸くなってお弁当を楽しんだりしました。

両園ともに「秋」を感じる気候と自然の中で遠足を楽しむことができたと思います。



ワニの母は慈母そのもの

ウミガメは、産卵期になると決まった海岸に到着し、その砂浜に穴を掘り、この中に百個近くの卵を産み込む。産卵が終わると、母ガメは丹念にその辺に砂をかけ、卵を隠して海に戻る。あとは卵が孵化し、子ガメとなって再び海の中にはいるのを期待するだけである。

もし仮にこの子ガメが海に戻り、親に出会ったとしても、互いにそれを認識することは全くないはずである。

しかし、少数の爬虫類では、産卵後も卵を保護し、孵化した子どもめんどろを見ることが知られている。

ある種のトカゲやコブラのような少数のヘビでは、メスが卵とともにとどまり、侵入者を追い払うが、コブラでは、オスもまた保護に加わるという。

ニシキヘビはまた特異で、産卵したメスは数十個の卵を中心にとぐろを巻き、数週間にわたってこれを保護する。その中でもインドニシキヘビなどは、鳥類の抱卵行動に近い行動を見せる。すなわち、とぐろを巻いたメスヘビは、単に保護するだけでなく、卵に温度を加えるのである。

変温動物であるヘビは、卵を温めることはできないが、インドニシキヘビは、体の筋肉を収縮させることによって熱を発生させ、抱卵温度を上げるのである。

上野動物園でもインドニシキヘビの繁殖例があるが、三十~四十個の卵の塚の回りにとぐろを巻いた母体が、その筋肉をビクッ、ビクッと収縮させる様子が観察されている。

ワニの保育はさらに手が込んでいる。

イリエワニでは、産卵すると、その上に大量の植物を運んできて積み上げ、大きな塚状の巣をつくる。巣の回りには何筋かの溝を掘り、その中に隠れて巣を見張り、侵入者を防ぐ。その間に積み上げられた巣材の植物は発酵して熱を発生し、三十~三十二度の温度を保つ。

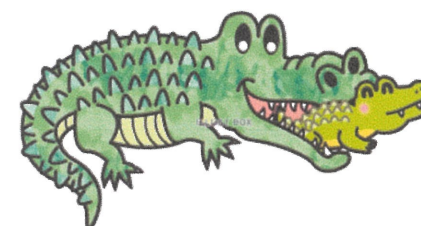
孵化した子ワニは、巣の中でかなり大きな声で鳴くが、耳ざとくこれを聞きつけた母ワニはすぐにやってきて、巣を崩し、子ワニたちが巣から脱出するのを助けるのだ。

それだけではない。

母親は巣から出てきた子ワニを一匹一匹くわえあげ、口の中におさめて安全に水のあるところまで運んで静かに放すのである。水に放してから、孵化後三か月ほどは、子どもの保護に当たる、という。

ワニという動物は、とかく凶悪動物のごとくイメージされているが、少なくとも、子育てに関する限り、慈母そのものである。

(元上野動物園長 中川志郎 著「パンダは舐(な)めて子を育てる」より抜粋)



補足

先日、ウミガメの産卵について、テレビで次のような話題が出ていました。

砂浜に産卵されたウミガメの卵は、孵化する時の温度が30度を超えるとメスになり、28度を下回るとオスになり、29度では雌雄が半々になるそうです。(爬虫類の「温度依存性決定」というそうです)地球温暖化が叫ばれている現在、30度を超えることは当たり前となりつつあり、その意味から、ウミガメはメスが多くなっており、近い将来ウミガメは絶滅してしまうのではないかとされているそうです。

